

## 創造都市としての「ポスト海峡植民地」 —タイ国プーケット旧市街地域を事例として—

### “Post-Straits Settlements” as Creative Cities: A Case Study of the Old Town of Phuket in Thailand

須 永 和 博\*  
SUNAGA, Kazuhiro

**Abstract:** In the former Straits Settlements, such as Melaka, Penang and Singapore, the so-called Baba Peranakan culture has been revitalized for tourism consumption recently. The Baba Peranakan culture can be considered as a hybrid mixing Hokkien, Malay as well as Western cultures, which was developed in the influence of British colonialism in the Malay Peninsula. In those areas, various types of Peranakan culture including architecture, fashion and food have been converted into tourist attraction by creative industries. This trend also occurred in Phuket in the 2000s, and the city was designated as a member of the Creative Cities Network by UNESCO in 2015. Although Phuket was not an area of the Straits Settlements, the island shares its history and culture with Penang. In the late 19th century, Siam invited several affluent Baba Peranakan from Penang to launch the mining industry in Phuket, and the town was developed by these Baba Peranakan, modelled after British colonial Penang. Therefore, Peranakan culture has also taken rooted in Phuket.

This paper aims to examine how the old town of Phuket has been transformed as a creative city and its social and cultural effects on local community. Seeking for an alternative model of urban planning in a post-industrial society, an argument on ‘creativity’ has become active since the late 1990s. ‘Creative class’ and ‘creative industry’ has been shedding light on as a crucial role for community development. In this circumstance, tourism is also considered as a sector of creative industries and some scholars assert the importance of ‘creative turn’ in tourism studies. However, the development of creative cities tends to cause uneven development of ‘gentrification’, marginalizing the lifeworld of local peoples of non-creative classes. To counter the gentrification, local movements to inherit their social memory and intangible heritage have arose in some areas. In this sense, ‘creative turn’ in urban development should be understand as a ‘contested space’ which various conflict and negotiation take place among multiple actors. In this paper, I argue such negotiated process in the reconfiguration as a creative city, introducing a case study of the old town of Phuket.

**Key words:** ババ・プラナカン (Baba Peranakan), プーケット (Phuket),  
創造都市 (Creative Cities), ジェントリフィケーション (Gentrification)

---

\* 立教大学観光学部・兼任講師 (獨協大学外国語学部・准教授)

- I はじめに
- II 観光研究における「創造的転回」
- III 観光化のなかのババ・プラナカン文化
  - 1) ババ・プラナカンとは
  - 2) ババ・プラナカン文化の再発見と商品化
- IV プークェット旧市街の観光化
  - 1) プークェット旧市街の概要
  - 2) プークェット旧市街の景観保全
- V 創造都市化の諸相
  - 1) 住民主導の取り組み
  - 2) 創造産業の集積
  - 3) 住民の帰還と創造産業への参入
- VI 考察とまとめ

## I はじめに

本論文は、プラナカンやババと呼ばれる海峡植民地由来の混成文化が根づくタイ国プークェットの旧市街地域を事例に、観光化に伴う地域コミュニティの変化の諸相について、創造都市や創造産業などの「創造性」に関する諸議論を踏まえた上で考察することを目的としている。

よく知られているように、シンガポールやペナン、マラッカなどの海峡植民地においては、ババやプラナカン、海峡華人などと呼ばれる現地生まれの華人がイギリス人の交易上のパートナーとして重要な役割を果たした(白石 2000: 24-25)。彼らは、自分たちのルーツである福建文化を基盤に、マレーやヨーロッパの文化的要素を融合した独自の生活様式を築き、海峡植民地特有の文化と都市景観を形成してきた(宇高 2002)。こうしたプラナカン文化と総称される混成文化は、脱植民地化の過程で一度は衰退したものの、近年、観光の文脈で再発見され、(ホテル等を含む)建築や料理、ファッション、アートなどの創造産業に取り込まれてきた(cf. イワサキ・丹保 2007)。それゆえ、プラナカン文化の再発見・商品化という現象は、ポスト海峡植民地の観光空間の諸相を明らかにする上では重要な切り口の1つといえる。

本稿で取り上げるプークェットは、厳密に言えば旧海峡植民地ではない。しかし、英国植民地勢力と向き合う最前線であったプークェットは、タイ王

室の庇護のもと、ペナン出身の華人によって開発された海峡植民地の「模造品」でもあった(片岡 2014: 4-6)。それゆえプークェットは、ペナン同様、海峡植民地由来のプラナカン文化が継承されてきた地域の1つであり、近年ではペナンにルーツをもつ華人の文化運動も活発で、シンガポールやマレーシアの華人たちとも国境を超えたネットワークを形成している(片岡 2014: 9)。

以上をふまえ本研究では、プークェット旧市街を事例に、プラナカン文化の再発見や商品化の諸相について、他のポスト海峡植民地の動向を視野に入れつつ、創造産業や創造都市論などの理論的枠組みを踏まえた考察を試みる。

## II 観光研究における「創造的転回」

近年、ポスト工業化社会における地域づくりの可能性を模索するなかで、創造産業や創造都市といった「創造性」に着目した議論が影響力をもつようになってきた(佐々木 2012, フロリダ 2007)。こうした創造都市論の嚆矢の1つとなったのは、リチャード・フロリダの一連の議論である。フロリダは、創造都市を特徴づける要素の1つとして「場所の質」という概念を挙げている。場所の質とは、①歴史的建造物などのその土地固有の文化的景観、②多種多様な人々が集まり相互に影響し合う寛容な社会環境、③そこを舞台に繰り広げられる芸術・音楽活動やカフェ文化などのストリートライフの活気などを包含した複合的な概念である(フロリダ 2008:297-298)。そして、こうした「場所の質」をいかに高めるかが、創造都市として再生しうるかの鍵とされている。

以上のような創造都市の理論的枠組みは、都市計画に従事する研究者や政策立案者を惹きつけ、「創造性」を重視したまちづくりが世界各地で模索されるようになってきた(Leslie and Catungal 2012)。たとえばUNESCOも、2004年に創造都市ネットワーク・プロジェクトを始動し、グローバル化による都市の均質化に抗って、文化産業の集積によって創造都市の実現を図る戦略的地域連携を模索している。さらに近年では、創造産業や創造都市の理論的枠組みを、都市だけでなく農山

村などにおける地域づくりに生かす議論もなされ、「創造性」は今日地域開発や地域再生の重要なキーワードとなっている（佐々木他編 2014, 敷田・内田 2015）。

こうした動向を受け、観光研究においても、観光を創造産業の一翼を担うものと位置づけ、その可能性や課題について検討を行ったものが発表されている（Chang and Teo 2009, Richards 2011, 敷田・内田 2015）。たとえばリチャーズは、アート・ツーリズムやクリエイティブ・ツーリズム、クラフト・ツーリズムなどの観光形態が隆盛している昨今の状況を「創造的転回（creative turn）」と呼び、創造性に着目した観光研究へとシフトしていくことの重要性を説いている（Richards 2011）。また、アートやクラフトのみならず、歴史的建造物のブティック・ホテルへの転用といったような現象を創造産業という視点から論じることで、文化遺産の保全というヘリテージ・ツーリズムの問題系と創造産業・創造都市論を架橋する試みもなされている（Chang and Teo 2009）。

しかし、創造産業や創造都市の可能性を論じる議論の一方で、それがもたらす様々な課題についても同時に指摘されてきた。たとえばシンガポールにおいて、植民地期に建設されたショッピングハウス<sup>1)</sup>がブティック・ホテルへと転用される状況について考察したチャンとテオは、ブティック・ホテルという新たな都市空間がシンガポールの文化的アイデンティティを表象する場となる一方で、非創造産業従事者や旧住民の周辺化という「創造的破壊（creative destruction）」が伴うことを指摘している（Chang and Teo 2009: 362-363）。また、マレーシアのパナンでは、家賃統制令の撤廃（2000年）や世界遺産登録（2008年）などをきっかけに創造産業の集積が進むなか、ショッピングハウスの居住者転出が急増し、パナンの場所性を支えてきた無形の文化遺産が衰退していることなどが指摘されてきた（藤巻 2016, Nagata 2010, Teo 2003）。

創造都市論にもとづく再開発は、クリエイティブな住民を惹きつける一方で、既存の経済社会空間がドラスティックに再編し、社会的・経済的な分極化（polarization）を生むというのが、これ

らの批判の中心である（Leslie and Catungal 2012, 清水 2016: 224）。しかし、こうしたジェントリフィケーションに対しては、民衆の社会的記憶や遺産を継承するための対抗的な運動が生まれる場合もある（cf. スミス 2014）。たとえば前述のパナンでは、地元NGOが中心となって、旧市街地で生業を営んできた職人の技術や生活文化を継承していくための取り組みを行うなど、ジェントリフィケーションのプロセスのなかで周辺化されてきた人々をエンパワーメントする活動が活発化している（宇高 2006: 108-109, 藤巻 2016:148-152, Nagata 2010:108-109）。このように、創造都市化に伴う都市のあり様は、複雑かつ錯綜しているといえる。

本研究のフィールドであるプーケット旧市街も、2015年に創造都市ネットワークに加盟するなど、創造都市化が急速に進行している。こうしたなか、新住民や外部資本の流入といった地域の急速な再編が進む一方で、地域コミュニティが中心となって、ボトムアップの様々なまちづくりの実践が模索されてきた。以上の点を踏まえ本研究では、創造都市化に伴う社会経済空間の変容を微視的な視点から考察し、創造都市としての再編が進むプーケット旧市街の社会・文化の動態を明らかにしたい。

### Ⅲ 観光化のなかのババ・プラナカン文化

#### 1) ババ・プラナカンとは

まず基本的な理解として、ババやプラナカン、海峡華人といった用語について若干の整理を行っておきたい。

ババとは、海峡植民地において中国生まれの新生移民と区別するために用いられた呼称で、土着化した中国系移民とその子孫を指す。男性がババ、女性はニョニヤと呼ばれるため、ババ・ニョニヤと表記されることもある。東南アジアの交易の中心であったマラッカには、15世紀以降、福建や広東など華南地域からの移民が増加していた。これらの移民の多くは男性単身者であったため、現地に定着する過程でマレー人と婚姻関係を結ぶことになる。こうして中国系男性とマレー系女性の

通婚によって成立した民族集団がババと呼ばれる人々である(宇高 2002: 7)。そして、中国系移民と現地人の混血が増加すると、その子どもたち以降の世代では、混血同士の婚姻、すなわちババ社会内部で婚姻が行われるようになる(片岡 2014: 3)。このような婚姻が繰り返されることで、次第に独自の文化や民族意識が形成されていったのである。

以上のような経緯で生まれたババの文化的特徴とは、福建とマレーの文化の混在であり、それは言語、建築、家具、料理、服飾など生活の全てにおいてみられる(宇高 2002)。たとえば、マレー社会におけるババは、ババ・マレー語と呼ばれる福建語とマレー語が混在した一種のクレオール言語を話す。そして、観光の文脈でも注目されている「ババ(ニョニヤ)料理」とは、中国の食材とスパイスやココナッツ・ミルクなどの東南アジアの食材を組み合わせることで創り出された創造的な食文化である(タン 2002)。

また、ペナン、マラッカ、シンガポールを合わせて自由貿易帝国である海峡植民地が編成されると、英国はマラッカ出身のババを同盟者として植民地体制に包摂していく。英国の帝国主義の庇護を得て地位上昇をしていったババのなかには、日常的に英語を使うなど、早くから西欧の文化やライフスタイルを取り込む者も多かった。それゆえ、植民地体制下においてババの文化は、マレーと福建だけでなく、西洋の文化も取り入れた独特な混成文化となっていったのである(宇高 2002)。

さらに19世紀以降、マラヤ諸州の鉱山やゴム園の労働者として中国から大量の労働移民(苦力)がやってくるようになると、こうした「新客」との違いを意識することで、ババとしての意識が強化され、ババを指し示す語として「海峡華人(Straits Chinese)」という呼称も使用されるようになっていく(安里 2014: 167)。その意味で、ババとは海峡植民地という特有の政治的・歴史的環境のなかで生まれた民族集団ということができよう(片岡 2014: 3-4)。

ところで、ババの呼称としてもう1つ、プラナカンという呼び名がある。プラナカンとは、マレー語で子供を意味する*Anak*から派生したもの

といわれ、移民と現地人の通婚による子孫を指す。したがって、プラナカンには、ババのような華人系だけでなく、アラブ系、インド系、ユーラシア系など様々なパターンがある。しかし、マレー半島では華人系が多いことから、プラナカンといえは一般的に華人系プラナカンを指す場合も多い(安里 2014: 166)。以下では、こうした呼称の混乱を避けるために、華人系プラナカンのことをババ・プラナカンと呼ぶことにしたい。

## 2) ババ・プラナカン文化の再発見と商品化

海峡植民地を背景に成立したババ・プラナカン文化は、1930年代がその黄金期であり、それ以降の脱植民地化の過程で一度は衰退していくことになる。しかし、1980年代後半から、各地のプラナカン協会の活動が活発化し、1988年にはペナンで第1回「ババ・コンベンション」が開催されている(安里 2013: 37)。

また同時期のシンガポールでは、歴史的環境の保全が本格化するなかで、戦前に建てられたショッピングハウスがババ・プラナカンの文化遺産として再発見され、それらをブティック・ホテルに転用する動きも活発になっていく(Chang and Teo 2009, Henderson 2003)。そしてその流れは、2000年代以降、隣国マレーシアのペナンやマラッカにも広がっていく(宇高 2006)。こうして、ババ・プラナカンの文化運動と並行する形で、ババ・プラナカン文化が観光資源化されていったのである。その後、2008年にはマラッカとペナンが世界遺産に登録されたことで、ババ・プラナカン文化は一種のブームとなっていく。シンガポールにおいても、この時期ババ・プラナカン女性を主人公にしたTVドラマ『リトル・ニョニヤ』が大ヒットし、ババ・プラナカン料理や食器、衣装、ビーズシューズといったババ・プラナカン文化への関心を高めた(安里 2013: 41)。こうして、ブティック・ホテルやレストラン・カフェ、ギャラリーなどにおいて、ババ・プラナカン文化は消費文化化され、創造産業に取り込まれていったのである(cf. イワサキ・丹保 2007)。

しかし、ババ・プラナカン文化への関心は観光という文脈だけにとどまらない。例えば、安里は、

シンガポールに2008年に開館したプラナカン博物館について、異種混交性や混血性を含むプラナカン概念が、シンガポールでは社会統合のシンボルとして捉えられ、ナショナル・アイデンティティの醸成にも結びついていることを指摘している(安里 2014:176-177)。同様に、奥村みさも、ババ・プラナカン文化が根づくシンガポールのカトン地区が、「真のシンガポール社会の調和」を示す場所として、シンガポール人にノスタルジアを掻き立てる場所となっていることなどを指摘し、ナショナル・アイデンティティとババ・プラナカン文化の関係について言及している(奥村 2009:263-269)。従来、シンガポールにおいては、CMIO(華人・マレー系・インド系・その他)というエスニックな区分にもとづく国民統合政策が採用され、ババ・プラナカンは華人カテゴリーではなく「その他」のカテゴリーに入れられることで曖昧な存在とされてきた。しかし、そうであるからこそ、プラナカン概念は状況依存的な可変的概念として恣意的に扱うことができるものとなり、「プラナカン=シンガポリアン」という国民統合のレトリックとしても機能しているのだという(安里 2014: 186)。混血、寛容性といったレトリックでプラナカン文化が語られることで、単なる観光文化にとどまらず、多民族国家において各エスニシティをつないでいく緩衝材としての役割が期待されるようになっていったのである。

以上のように、1980年代後半から、ババ・ナプラナカン文化の再発見と商品化がマレーシアとシンガポールを中心に広まっていくが、その流れは「模造」のポスト海峡植民地であるプーケットへも波及していく。そこで以下では、プーケット旧市街におけるババ・プラナカン文化の再発見の経緯を整理していきたい。

#### IV プーケット旧市街の観光化

##### 1) プーケット旧市街の概要

前述したように、プーケット旧市街は19世紀末から20世紀初頭にかけて、ベナン出身のババ・プラナカンの移民たちによって開発された海峡植民地の「模造品」であった(片岡 2014)。当

時のシャムにとって、マレー半島の南側を統治していた英国勢力にどのように対峙し、主権を確保するかが大きな関心事の1つであった。そしてプーケットは地政学的に英国植民地体制に接するフロンティアでもあり、そこに安定した統治基盤を置くことは政策的にも重要なことであった。しかし、19世紀初頭のビルマによる侵攻によってプーケットの人口は激減していた。そこで当時のシャム政府が採った戦略が、ペナンで財と政治力を成していたババ・プラナカンを誘致して、錫高山開発を行い、さらには徴税請負をまかせるという海峡植民地と同様の運営手法であった(片岡 2014: 5)。そのようななか、錫を輸出する港として現在のプーケット旧市街が開発された(Khoo 2009)。

これらの市街地の開発は、錫鉱山経営や徴税請負などによって財と政治力を成したベナン出身の中国系移民によって進められたため<sup>2)</sup>、中国・ポルトガル様式などと呼ばれる折衷様式のショップハウスやコロニアル様式の邸宅が立ち並ぶペナンと酷似した都市景観が形成されることになった。特に、旧市街地域にあるターラン通りのショップハウスには、ベナンやバンコクなど各地から人が集まりプーケットの商業的中心地となっていくた。

この時期のプーケットは、経済的にはバンコクよりもベナンとのつながりの方が強く、錫をベナンに輸出する一方で、様々な商品がベナンからプーケットに流入した。それゆえ当時のプーケットは、バンコクに次ぐタイ有数のモダンな都市であったとも言われている(Phuket Thaihua Museum 2008: 31)。また、富裕なババ・プラナカンは子弟をバンコクではなく、ペナンに留学させるなど、文化的にもベナンとの関係の方が密であった(Khoo 2013)。

しかし、第二次世界大戦後、ベナンとの経済的・文化的つながりは希薄化していき、また東西冷戦を背景にタイ政府が華人に対する同化政策を強めたため、福建文化を基盤にしたプラナカンの文化的独自性が表立って語られることもなくなっていった。さらには、錫鉱山の閉山と時を同じくして進められたプーケット島の観光開発が、西海岸のリゾート開発に集中したため、東側に位置す

るプーケット旧市街は主要なツーリズム・モビリティのルートから外れていった。こうして、プーケット島は3S (Sun, Sand, Sea) を売りにした無国籍で代替可能な「楽園観光地」(cf. 吉田 2012) としてのイメージが強固になっていったのである。

しかし、1990年代に入ると、プーケット市が主導する旧市街の歴史的景観の保全活動や観光振興が進められるなかで、地元のプラナカンのあいだでも自らのエスニシティや文化に対する意識が芽生えていくようになる。2000年代に入ると、プーケットのババ・プラナカンも旧海峡植民地で行われてきた国際ババ・プラナカン会議に参加するなど、周辺国との国際的連携を生み出してきた(片岡 2014: 9)。こうしたプーケット市の施策とプラナカンの文化運動が相互に関わりあうなかで、プラナカン文化に対する観光のまなざしが徐々に醸成されていったのである。

## 2) プーケット旧市街の景観保全

以下では、プーケット旧市街地域の景観保全の具体的なプロセスと、そのなかで生じた観光化の諸相について整理したい。

プーケット市では、戦前に建てられたプラナカン様式のショップハウスや邸宅が並ぶ旧市街地域を対象に、1992年から景観保全事業が始められ、翌1993年には王室をパトロンとする「シャム建築家協会 (the Siamese Architects Association)」から歴史地区に認定された (Khoo online)。またこの時期、バンコクの大学から建築史の研究者を招聘し、旧市街地区の建築データベースの作成やコミュニティ・フォーラムを行うなどして、景観保全をめぐる官・学・民が協働でその方向性を探っていった。そのようななか、2004年には国家環境省の環境政策・計画局より文化遺産保存区域に指定され、高さ12メートル以上の建造物の新規建設が認められないなどの具体的な規制が導入されていった。これと並行して、市当局も独自に保存状態の良い建築に対してアワードを付与し、一部の通りの電柱を地中化するなど、景観保全事業が進んでいった (Khoo online)。

このような景観保全事業は、プーケット在住のババ・プラナカンの文化的覚醒を促し、2006年に

は「タイ・プラナカン協会」が設立された(片岡 2014)。さらには、ババ・プラナカン文化を強調した観光客向けのイベントもこの時期いくつか企画・立案されている。たとえば、1998年から毎年旧正月に行われているお祭り「ヨーン・アディット (過去を振り返る)」は、プーケット旧市街の歴史・文化を紹介する観光客向けイベントであり、現在では9～10月に行われる「菜食祭 (thetsakan kin che)」に次いで、大きな集客イベントとなっている。また、2005年より、ババ・プラナカン形式の合同結婚式イベント (wiwa Baba) を毎年10月に開催するなど、ババ・プラナカン文化を発信するイベントを行うようになっていった(片岡 2014: 8-11)。

また、文化的・歴史的に多くの共通点をもつペナンが世界遺産に登録されたことに触発され、プーケット市もUNESCOなどの国際機関による認証の可能性を模索していく。しかし、プーケット旧市街は、世界遺産に登録されているペナン島・ジョージタウン旧市街の1/5とも言われる小さな街のため、世界遺産登録の実現は難しい。そこで、福建やマレーの食文化が融合した独特の食文化を強調する形でUNESCOの創造都市ネットワークに申請し、2015年12月に同ネットワークへの加盟が決まった。

以上のような取り組みが進められるなかで、2000年代後半からプーケット旧市街を訪れる観光客は増加傾向にある。ただし、今日プーケット旧市街を訪れる観光客の圧倒的多数は、タイ人の国内観光客である。2000年代以降のタイでは、経済成長を背景に国内観光が急速に拡大している。この国内観光のなかでは、古い木造建築が残る市場が「百年市場 (talaat roypi)」と総称され、そこを訪れることがブームになるなど、古い町並みや景観が再発見され、観光消費の対象となるというケースが散見される。こうした国内観光の動向については、ノスタルジア・ツーリズムと呼ばれ、ノスタルジアはタイ国内観光の動向を考察する際のキーワードともいえる (Suchat 2009)。この点を踏まえると、古いショップハウスが立ち並ぶ歴史的景観に注目が集まるようになった背景には、タイ社会におけるノスタルジー消費の隆盛といっ

た現象も多分に影響している<sup>3)</sup>。言い換えれば、プーケット市の景観保全事業やババ・プラナカンの文化的覚醒といったプル要因に加えて、国内観光やノスタルジー消費の高まりといったプッシュ要因も絡み合うなかで、プーケット旧市街の観光化が急速に進んできたといえる。

## V 創造都市化の諸相

以上、プーケット旧市街の景観保全と観光化について、主に市当局の取り組みに焦点を当てながら整理してきた。そこで次に、このような動向のなかで旧市街の社会・経済空間がどのように変化しているのか、もう少しミクロな視点からその動態を明らかにしたい。

### 1) 住民主導の取り組み

#### ①夜市

プーケット旧市街では、目抜き通りでもあるターラン通りに暮らす地域住民が中心となって、住民団体「プーケット旧市街コミュニティ (*chumchon yang muangkao phuket*)」を組織し、景観保全や観光振興に関してプーケット市当局と様々な折衝を行う他、独自の集客イベントなどを企画・運営している。その1つが、毎週日曜日にターラン通りを歩行者天国にして行われる夜市である。この夜市は、2014年より「プーケット旧市街コミュニティ」が主導して始めたもので、毎回200店舗ほどの露店が集まる。夜市で出店をしている人のなかには、近隣で商いをしている地元住民の他、日曜日だけ小遣い稼ぎ程度にローカルな料理などを振る舞う住民もいる。出店者からは250～300パーツほどの出店料を、前述の住民団体が徴収し、その一部をターラン通りにあるショップハウスのファサードの改修費用に充てたりしている。

以上のように、プーケット旧市街では住民主導で祝祭的な空間を創出することで、地域住民に小商いの機会を提供すると同時に、景観保全の集合的主体としてのコミュニティ意識が形成されていったといえる。

さらに近年では、戦前から商いをしてきた住民

の暮らしや彼らを通してみたプーケットの歴史を伝えるべく、同団体のメンバーがガイドとなった街歩きを実験的に行うなど、コミュニティ・ベースド・ツーリズムの手法を取り入れた活動にも力を入れている。

#### ②プライベート・ミュージアム

錫鉱山の経営で経済的な成功を収めたプーケットのババ・プラナカンは、1970年代の閉山後は、ホテル経営や貿易商、宝石商などへ進出し、莫大な財力を得た者も多い。プーケット旧市街に暮らすババ・プラナカンには、今日でも経済的・政治的に影響力をもつ住民も少なくない。たとえば、クラブ通りにコロニアルなデザインと華南地域の建築的伝統を融合させた邸宅を所有するチンプラチャー一族はその代表といえる。「バーン・チンプラチャー (チンプラチャー家)」と呼ばれるその邸宅は、ペナン出身の福建系華人で、錫鉱山事業で財を成した陳威儀 (*PraPitak Chinpracha*) によって1904年に建設された。ペナンから職人を招き、3年ほどかけて完成させたプラナカン建築は、その遺産的価値が評価され、2009年には「シャム建築家協会」から賞を授与されている他、『キリング・フィールド』など、映画やドラマなどの撮影の舞台としても使われてきた。

陳威儀の孫である *Khun Pracha Tandavanitj* 氏が相続してからは、訪問者の見学を随時受け入れ、陳一族の歴史を伝えるなどの活動をしていった。そして2007年に同氏が亡くなると、同氏の妻が正式にプライベート・ミュージアムとして整備し、現在に至っている (*Knapp* 2010)。館内には、陳一族が所有していたアンティークのプラナカン様式の家具や調度品などが展示され、往時の富裕なババ・プラナカンの暮らしを伝える施設となっている。

似たような施設としては、プーケット旧市街で宝石商を営むババ・プラナカンが2017年に設立した「プーケット・プラナカン・ミュージアム」がプーケット島の北側、プーケット国際空港からほど近い場所にある。そこでは、再現されたショップハウスなどババ・プラナカンの衣食住に関する展示の他、プラナカン料理を提供するレス

トランやプラナカン雑貨、「サロン・クバヤ」と呼ばれる女性用衣装、自社製品の貴金属などを販売するブティックも併設されている。その意味で、同ミュージアムは、前者に比べて消費文化としてのプラナカンを強調したミュージアムといえる。

以上、地元の富裕なババ・プラナカンによって開設されたミュージアムを2つほど紹介してきたが、いずれにおいてもそこで表象されているのは支配層のババ・プラナカンの暮らしや文化であり、それを支えた民衆の社会的記憶を伝えるものでは必ずしもない。

### ③コミュニティ・ミュージアム

それに対して、2002年に開館した中華学校跡地を利用してつくられた「プーケット・タイファ博物館」は、プーケット旧市街のより市井の人々の記憶を表象した展示といえる。もともとこの場所には、1911年に開設されたタイファ中華学校<sup>4)</sup>というタイ国最初の中華学校が立地していた。しかし、同校が1990年に郊外に移転したのをきっかけに、同窓会組織が中心となって跡地の利用方法を検討するなかで、敷地内にある1934年に建設されたプラナカン様式の旧校舎を博物館として利用する計画が持ち上がった。そこで、中華学校の運営母体である「プーケット善行財団 (*Phuket Kuson Songkroh Foundation*)」が資金を供出して2002年に開設したのが同博物館である。前述のプライベート・ミュージアムが、富裕なババ・プラナカンの暮らしぶりを紹介しているのに対して、このミュージアムでは、鉦山開発の歴史やそれに関わった福建系華人・秘密結社などプーケットの近代史にまつわる展示、中国人学校の歴史、庶民のローカルな食文化などを紹介する市井の中華系移民の暮らしぶりを伝える展示が主である。

また、このミュージアムは、単にプーケットの歴史や文化を紹介するにとどまらず、敷地内の庭では地元のババ・プラナカンの様々な祭礼の場所としても活用するなど、地域に根ざしたコミュニティ・ミュージアムとしての側面も強い。

## 2) 創造産業の集積

今日でもプーケット旧市街には、漢方や福建麺

などを売る中華系移民の店や、インド系ムスリムが経営する食堂、バティックなどを販売する布屋など、戦前から商いを続ける多種多様な店舗が立ち並んでいる。このような状況を反映して、地域住民のなかには、異なる人種・民族が別々の区域で暮らす傾向の強いペナンに比して、プーケットの場合は多様な文化が混ざり合いながら共存する「調和の街」であることを強調する人も多い。たとえばインド系タイ人の食堂でも、カレーやロティなどのほか、中国茶や生ビールが提供されること、インド系タイ人と華人女性の夫婦が営むバティック店などもあること、華人の廟の隣にキリスト教会が立地していることなど、狭い空間のなかに多種多様な人々が混在していることをプーケットの特徴として語る。

既に述べたように、プーケット旧市街はマレーシアのペナンと共通の歴史・文化を有しながら、街の規模としてはペナンの1/5とも言われ、しばしば「ペナンの縮小版」と揶揄されることもある。それに対してプーケットの住民のあいだでは、ペナンに比べて小規模であるがゆえに、異なる人種・民族が分離することなく共存しているのがプーケットの独自性であると、ペナンと差別化するような語りが見られる。

とはいえ、プーケット旧市街においても若年世代の住民流出に伴う空洞化は深刻であり、戦前から小商いを続ける世帯も減少傾向にある。しかし、こうした空洞化が進む一方で、2000年代に入ってから、外部資本の進出や移住者の流入などによってジェントリフィケーションが徐々に進行している。そして、消費文化としてのババ・プラナカンへの注目が高まるなかで、ババ・プラナカンをコンセプトにしたブティック・ホテル(ゲストハウス)やレストラン、アート・ギャラリーなどが増え、創造都市としての特徴が顕著にみられるようになってきた。以下では、こうした創造都市としての性格が強まりつつある近年の変化を整理していきたい。

### ①ブティック・ホテル、レストラン

2000年代以降の東南アジアでは、歴史的建造物をスタイリッシュなホテルやゲストハウスに転



用したブティック・ホテル（ゲストハウス）と呼ばれる業態が急増している。そのような流れは、プーケットにおいてもみられ、その代表的な事例の1つが2012年に開業した「メモリー・アット・オンオンホテル」である。

このホテルの前身となったのは、1929年にババ・プラナカンの貿易商Anurak Tansiroj氏が創業した「安安旅社（On On Hotel）」である。建設にあたっては、ペナンから職人を呼ぶなど、プラナカン様式にこだわった当時の先端的な建築デザインにし、戦前はプーケットを訪れる貿易商らで賑わったと言われている。しかし、錫の交易が下火になり、ビーチを目指すマストゥーリズムの主要ルートからも外れた後は、一部のバックパッカーなどが集まる安宿となっていった。たとえば、『地球の歩き方』（1996～1997年版）では、「ある程度は売春宿になっている」などの記述もあり、往時の繁栄とはだいぶ異なる状況になっていたことが窺える。また、2000年に公開されたレオナルド・ディカプリオ主演の映画『ザ・ビーチ』でも、主人公が泊まるバンコクの安宿という設定で、同ホテルが撮影場所として使用されている。

しかし、プラナカン建築をコンセプトにした建造物であるがゆえに、然るべき改装を行えばブティック・ホテルとしての転用が可能なポテンシャルはあったといえよう。プーケット旧市街を訪れる観光客が急増するなかで、こうしたポテンシャルに目をつけたのが国内で高級ホテルを多数運営するバンコク資本のホテル運営会社The Treasury Village Groupである。同社が、ペナンやシンガポールで隆盛しているプラナカン・スタイルをコンセプトにしたブティック・ホテルなどを参考にリノベーションし、2012年に新たに開業したのが「メモリー・アット・オンオンホテル」である。ホテル内には、プラナカン雑貨を売るブティックなどを併設している他、客室やパブリック・スペースには、プラナカン雑貨やアンティーク家具などを所々に配置し、プラナカン文化とノスタルジアに訴えるデザインを志向している。

またプーケット旧市街には、プラナカン料理や南タイ料理をベースにした創作的なフュージョン

料理店の進出も進み、その傾向は2015年の創造都市ネットワークへの加盟後に加速化している。おそらくその嚆矢となったのは、1940年に建設されたババ・プラナカンのプラナカン様式の邸宅をそのままレストランに転用した高級レストラン「ブルー・エレファント」である。もともとブルー・エレファントは、ベルギーで起業された創作的なタイ料理を提供するレストランであったが、ヨーロッパでの人気を背景に1990年代にバンコクにも進出した。バンコクの店舗は、コロニアルな雰囲気で作画的なフュージョン料理を提供するというコンセプトになっており、そのコンセプトをそのままにプーケットでも支店を開業したのである。

以上述べてきたように、プーケット旧市街では、プラナカン建築をホテルやレストランなどに転用した創造産業が集積するようになってきている。そのなかには、上述したような外部の大規模資本の参入も含まれるものの、いわゆる「独立系」（金 2018: 151）と言われるような小規模資本の参入も目立つ。プラナカン様式の邸宅など、比較的大きな建物のリノベーションには相応の資本が必要になってくるが、1つ1つのユニットは決して大きくないショップハウスにおいては、むしろ小規模資本による新規ビジネス参入が一般的である。そこで以下では、ショップハウスを利用した新たな創造産業参入の事例を紹介したい。

## ②ショップハウスを活用した小規模ビジネス

旧住民の流出が進んだことで、2000年代初頭までは、プーケット旧市街の中心地域であるターラン通りでもショップハウスの空き家が多かったという。しかし、観光振興が進む中で、その空き家を利用して新たなビジネスを行う移住者が徐々に増えてきている。その1つの事例として、ここではターラン通りにあるギャラリーや書店を併設したカフェBookhemianを取り上げる。同店は、もともと印刷工場であったショップハウスをリノベーションしたカフェであり、活版印刷で使われていた鉛型をインテリアの一部にするなど、この建造物の歴史性を多少なりとも伝える店舗デザインを志向している。

現在、このカフェを経営している中心的な人物の1人が、医師兼作家のA氏である。彼は村上春樹などにも傾倒し、自身も小説を書いているため、店内にはタイの現代文学の他、村上春樹など海外のタイ語版翻訳作品も多数売られている。1階がカフェ兼書店となっており、2階は写真展や短編映画上映、創作的ワークショップに使われるギャラリー・スペースとなっている。現在、このカフェには国内外の作家、アーティスト、映像作家が訪れ、交流するスペースとなっており、旧市街地域で最も有名なカフェの1つとなっている。ただし、このカフェで行われる上映会やワークショップには、地元の若者も参加し、新旧双方の若い世代の住民が交流するスペースとなっている。

このようにプーケット旧市街には、「創造階級」に属する若い世代の移住者が集まるようになり、それによってアトリエやギャラリーなども増加傾向にある。

### ③ストリートアート・プロジェクト

「創造階級」に属する若い世代が流入するなかで、アートに関心をもつ新旧双方の住民が協働で始めたプロジェクトの1つにストリートアート・プロジェクトがある。同プロジェクトは、2015年の創造都市ネットワークへの加盟を契機として始められたもので、2015年から2017年にかけて旧市街地域の12の箇所でプーケットの場所性を表象するウォール・アートを制作した。このプロジェクトの一環として制作されたウォール・アートのほとんどは、タイ人アーティストによって描かれたもので、外国人アーティストによる作品は1点のみである。

その有名な作品の1つに、アレックス・フェイスによる「Red Tortoise Mardi」という作品がある。彼は、Mardiと呼ばれる3つの目をもつ少女をモチーフにした作品で知られるタイ人作家で、この作品ではそのMardiの体が赤い甲羅の亀になっている。実は、この赤い甲羅の亀は「アンクー (angkoo)」（福建語で「赤い亀」の意）や「カノム・タオデー (khanom tao daeng)」（タイ語で「赤い亀のお菓子」の意）などと呼ばれるババ・プラナカンに伝わる菓子である。もともと

この菓子は、地元のババ・プラナカンが旧暦7月の中元節に行く「ポーター」と呼ばれる祖先祭祀の儀礼で用意されるものである。つまり、アレックス・フェイスのウォール・アートは、地元のババ・プラナカンの慣習をアートという媒介を用いて可視化しているといえる。このように、同プロジェクトにおいて制作されたウォール・アートは、いずれも、(必ずしもババ・プラナカンに限定されない) プーケットのローカリティを可視化したものであり、様々なモチーフが混在しているベナンとの差別化を多分に意識したものといえる<sup>5)</sup>。

なお、このストリートアート・プロジェクトは、2017年～2018年にかけて「シーズン2」の取り組みが行われている。「シーズン1」が国内アーティストとはいえ、島外の著名なアーティストを招聘したのに対して、「シーズン2」は主にプーケット在住の作家や学生によって制作が行われている。その中心的な担い手の1つが、地元の子どもたち向けに創作的なワークショップの機会を提供しているアトリエ、4Studioである。「シーズン2」では、このアトリエを主宰するアーティストが中心となって、地元の芸術系大学に通う学生らが共同で9つの壁画を制作した。そこでは、新たにウォール・アートを制作する他、「シーズン1」で制作されたウォール・アートに「加筆」といったことも行われているが、いずれもプーケットの歴史や文化といった場所性をモチーフに作品制作がなされている。このような取り組みは、単に地元の若者に創作の場を提供しただけでなく、地域の文化とは何かを若者自身が問い直すという積極的な契機となっていると考えられる。

以上のように、外部の著名な芸術家による作品制作から始まったストリートアート・プロジェクトは、次第に地元の若者による創作的取り組みを表現する場ともなり、地域に根づいていったといえる<sup>6)</sup>。

### 3) 住民の帰還と創造産業への参入

これまで述べてきたように、プーケット旧市街地域は、景観保全事業と観光振興が進められるなかで、徐々に創造都市としての性格をもつようになっていった。こうした変化のなかで、いったん

外部に流出した若い世代が再び戻ってくるという、Uターンも目立つようになってきている。こうしたUターンのなかには、高い文化資本を有する「創造階級」に属する人々もおり、彼らが新たに手がけるビジネスによって創造都市化に拍車がかかるといった状況もみられる。そこで以下では、Uターン住民によって行われている新しい取り組みの事例を2つほど紹介したい。

### ① Torry's Ice Cream Boutique

目抜き通りであるターラン通りから1本入った狭い路地にある、ショップハウスを改装した自家製アイスクリームを提供するカフェである。オーナーのB氏は、プーケット旧市街で生まれ育ったババ・プラナカンだが、中学卒業後は米国に留学し、シカゴの大学で食品科学の学位を修めた。卒業後は、米国内のホテルでパティシエとして働き、仕事も順調だったため、当初はプーケットに戻ることは考えていなかったようだ。しかし、旧市街の観光地化が進むなか、新たなビジネス・チャンスを模索していた姉に誘われて、プーケットに戻り、この店をオープンさせた<sup>7)</sup>。

戦前に建てられたショップハウスを改装した店内には、プラナカン様式の食器や家具などが置かれ、B氏自身もババの衣装に身を包むなど、ババ・プラナカン文化を強く意識した店舗デザインになっている。彼が作るアイスクリームにもそれが現れており、プーケットのローカルな菓子を用いたメニューがいくつかある。そのなかでも一番人気があるのが、「ビコモイ」というメニューである。ビコモイとは、かつて福建系華人の間で食されていた菓子で、砂糖で甘く煮た黒米のもち米にココナッツ・ミルクをかけたものである。このお店では、それを濃厚なバニラアイスにかけたものを提供している。ビコモイは、若い世代では食べる機会があまりなく、存在そのものを知らない人も多かったようだが、アイスクリームのメニューに取り入れたことがきっかけで、再び注目を集めているようだ。ただし、B氏は、単なる「オールド・ファッション」にはしたくないという。たしかにババ・プラナカンを強く意識した店舗デザインやメニューを採用しているが、アイス

クリーム自体はイタリアで手に入れた最新のアイスクリーム・マシーンを使った「本格派」であり、新たなメニューの考案にも余念がない。こうした「伝統」と「革新」を融合したところにB氏が提供するアイスクリームの面白さがあるといえる。このように、高齢住民の記憶のなかにしかもはや存在していなかったような菓子を、クリエイティブな発想で再生するという創造産業の1つの可能性をB氏の実践から学ぶことができる。

また現在、この店を訪れる客のうち9割がタイ人で、そこには一定数地元住民も含まれるという。B氏自身は「観光客のみならず、地元の人々にも愛されるお店にしたい」という思いがあるようだが、それについてもある程度成功しているといえる。R. フロリダは、R. オルデンバーグ (2013) の「サードプレイス」の議論を参照しながら、創造都市としての場所の質を醸成していくためには、コミュニティ内における社交活動が重要になってくるといって挙げている (フロリダ 2008: 289-290)。

この事例から分かることは、ジェントリフィケーションが進む一方で、創造的な空間が、旧住民にとっての新たな社交の場＝サードプレイスとして「生活の場」に取り込まれていっているということである。

### ② I 46 Old Town

新たな創造産業の現場が旧住民の「生活の場」としても受容されているという事例は、以下で述べるショップハウスを改装したカフェにおいてもみられる。I 46 Old Townという名のカフェに転用されたショップハウスは、もともと錫鉱山ビジネスに関わっていたババ・プラナカン一族の自宅であり、現在も1階の奥と2階はオーナー一家の自宅となっている。

同カフェを経営するC氏は、高校までは旧市街で育ったものの、進学をきっかけに旧市街を離れた。大学で学んだ日本語を生かして、卒業後は10年以上にわたってプーケット島内の日系の大手ランドオペレーターに雇われ、ガイド業をしていた。しかし、プーケットで職を得たものの、郊外にアパートを借り旧市街に戻ることはなかった

という。旧市街に戻る転機となったのは、結婚と妻の出産である。ガイドとしての評判も高く、会社から表彰されるなど仕事自体はとても充実していたそうだが、家族と一緒に過ごす時間はなかなかとれなかった。そんなとき、ふと自分の子どもの頃を思い出したという。三世代が同居していたショップハウスでの暮らしは常に家族が一緒であったし、近所の親戚や友人・知人が頻りに訪ねてくるなど、人の繋がりも今よりずっと濃密であった。C氏は、娘が生まれたことをきっかけに、かつては当たり前であった旧市街での暮らしを再発見し、それを取り戻したいという思いが湧き上がってきたという。そこで、勤めていた旅行会社をやめ、両親が暮らすショップハウスに戻ってカフェを開く決心をしたのである。店名の「I」とは彼の愛娘の名前でもある。

自宅を兼ねたショップハウスの一部を改装したカフェは、10人も座ればいっぱいになるほどの大きさである。現在はC氏と彼の奥さんの2人で切り盛りしているが、家族の暮らしを最優先するため、5歳の子どもが帰ってくる16:00には閉店し、週末も土曜日はお店を閉めている。主な看板メニューは、肉骨茶（バクテー）や「ムーホーン」と呼ばれる中華豚の角煮など、福建系華人にルーツをもつローカル料理であるが、トーストやサンドウィッチ、自家製のマフィンなども提供している。そして、C氏一家が長年使ってきたアンティーク家具や雑貨が置かれた店内には、一家の歴史を窺い知ることのできる昔の写真も多数飾られ、それに見入る客には、接客の傍でC氏が様々な説明をしてくれる。

この古いショップハウスを生かしたノスタルジックな雰囲気のカフェには、意外なほど地元の人が多い。朝8:00から営業しているのだが、朝食時はほとんどが地元の住民であるし、昼時は近くのオフィスで働くオーナー一家の友人や知人が昼食をとりに来る。そのためか、すでに隠居しているC氏の両親は、いつも表通りに面した椅子に腰掛け、やってくる地元の客と談笑をしている。なぜこうも地元の人たちを惹きつけるのかといえば、C氏のお店が一部の地域住民にとっても「古き良きプーケット」を感じさせる空間であるから

である。かつては、ショップハウスである自宅の軒先を開放した「コピ・ティウム」と呼ばれる地元の人たちが集まるコーヒーショップがこの界隈に多数あったそうだが、その多くは姿を消してしまった。他方で、レトロ・イメージをコンセプトにした新しいカフェやレストランは増えているものの、それらの多くは表面的な雰囲気演出にとどまっており、そこに旧住民が懐かしさを感じるものはあまりない。それに対してI 46 Old Townは、新たなカフェ空間でありながら、戦前から暮らすババ・プラナカン一家の「生活の場」としての側面を残しているがゆえに、「場所の力」（ハイデン 2002）とでもいうべきものが濃密に埋め込まれているのである。

都市史研究者のD. ハイデンは、地域における民衆の集団的・社会的な記憶を育む力を「場所の力」と呼んでいる（ハイデン 2002）。そして、この「場所の力」を醸成していくためには、建築学と社会史が相互に密接な関係を取り結ぶことが重要であると指摘している。すなわち、①民衆の生活の場となってきたような建造環境に目を向け、それを社会史や地域史といった視点から捉え直すこと、②これらの建造環境を活用して集団的・社会的記憶を育む創造的手立てを見つけ出す、という2つの試みによって「場所の力」が育まれていくという（ハイデン 2002）。

以上の点を踏まえると、I 46 Old Townは、「生活の場」であることと、スタイリッシュなカフェという創造的な空間であることをバランス良く並置させることで、プーケット旧市街の生活の記憶を育む「場所の力」を作り出すことに成功し、観光客のみならず、地域住民が集うサードプレイスとしても機能しているのである<sup>8)</sup>。

## VI 考察とまとめ

これまでの記述を踏まえた上で、以下では若干の考察を行いたい。特に、ペナンを事例に論じられてきた先行研究とプーケットの事例を比較することで、プーケットの特徴をより明確にしていくことを目指す。

海峡植民地を背景として、歴史的にも文化的に

も共通点の多いプーケットとペナンであったが、戦後その関係は希薄になっていった。しかし、今世紀に入ると、再び創造都市化という共通の経験を共有することになっていく。しかし、創造都市化がもたらした影響は、プーケットとペナンでは大きな違いがみられる。すでに論じたように、ペナンでは2000年代以降、家賃統制令の撤廃や世界遺産登録を背景に旧市街地域のショッピングハウスがブティック・ホテルやレストランなどに転用されていったが、その開発に関わったのはシンガポールや欧米などの外部の資本が中心である。その結果、ペナンの場所性を支えていた旧住民の多くは移転を余儀なくされた。それに対してプーケットでは、外部資本の流入は見られるものの、その影響は限定的で、旧住民の排除というジェントリフィケーションの進行はペナンほどには進んでいない。その理由について、ペナンで NGO を立ち上げ、同地域の文化遺産保全の活動を行ってきたクーは、借家人が多かったペナンに対し、プーケットは居住者が個々のショッピングハウスの所有権を有していたため、過度のジェントリフィケーションは起こり得なかったとしている (Khoo online)。

しかし、土地の所有権の有無だけでプーケットとペナンの違いを説明するのは、単純化の誹りを免れない。そこで以下では、両地域の違いを生んだ要因について、もう少し多角的に考察を試みたい。

まずプーケット旧市街の住民のなかには、医者や実業家、政治家など、高い経済資本・文化資本を有するババ・プラナカンが一定数いたことが挙げられる。錫鉱山経営で富を子弟の教育的投資に使うことで、プーケット社会のなかで一定の社会的・経済的地位を築いていった地域住民のなかには、いち早くショッピングハウスの文化的価値に気づき、景観保全活動に積極的に参与しながら、引き続きショッピングハウスを住居や職場として利用していった人も多い。前述したターラン通りの住民を中心とする「プーケット旧市街コミュニティ」の活動も、こうした経済資本・文化資本の高いババ・プラナカンが中心となって組織されていった。

また、富裕なババ・プラナカンの家庭で育った

若い世代は、教育や仕事のためにプーケット島外に出るケースが多いものの、Uターンで戻った際にはその経済資本・文化資本の高さゆえに新たな創造産業に参入しやすい状況にあったといえる。Torry's Icecream Boutique や I 46 Old Town などはその典型的な事例として考えられよう。自分たちの文化的遺産に自覚的でありながら、それを創造的な手法を用いて事業化していくというノウハウは、高い文化資本を要するものである。富裕なババ・プラナカンの家庭で育ったがゆえに、こうしたノウハウを身につけることができたといえよう。

そして、もう1つ重要な点として指摘しておきたいのは、観光化の中で新たに生まれた都市空間が、地域住民の「生活の場」とも重なりあうなかで、「地域」(松嶋 2014: 178-183)を生み出しているという点である。地元のババ・プラナカンが様々な祭礼行事を行うコミュニティ・ミュージアムとしてのタイファ博物館や、住民のサードプレイスとなっているカフェなどの事例からも分かる通り、新たに生まれた創造的な場が地域住民の〈顔〉の見える関係性がつくられる結束点=「地域」にもなっているのである。それは、地元のババ・プラナカンが「コン・ブンター」<sup>9)</sup>と呼ぶ地元住民(旧住民)が作り出した空間だけでなく、数は少ないものの Bookhemian など移住者によってつくられた空間においてさえもみられる。こうして創造産業の現場が、単に観光客のためだけの空間ではなく、地域住民の顔の見える関係性の場としても機能していているのである。

ところで、プーケット旧市街の〈地域〉を構成しているのは、ババ・プラナカンという福建系華人だけではない。海峡植民地の「模造品」という歴史的背景のなかで、数としては少ないもののインド系やマレー系、タイ系ムスリムなど様々なエスニシティをもつ住民が共住しており、プーケット旧市街はコスモポリタンな社会・経済空間といえる (Khoo online)。従来のプーケット社会では、その文化的独自性を語る際には、土着化した福建系華人を指す「ババ」という呼称が使われることが一般的であったのに対し、近年では特定のエスニシティに限定されないより包括的な概念である

「プラナカン」という用語を使用する機会が増えている。混血・多文化といったコノテーションを含む「プラナカン」という語を積極的に使用するようになった背景には、プーケット旧市街のコスモポリタンな場所性とアイデンティティの表明という、地域コミュニティの戦略的自己表象としての側面が強い。前述したように、プーケット旧市街の住民は、エスニシティごとに居住地が分かれるペナンに対し、プーケットが多様な文化・エスニシティの共存する包摂力の高い都市であることを強調する。こうした言明は、世界遺産という圧倒的なブランド力を有するペナンに対して、プーケットの文化的独自性を発信する一種の対抗言説ともいえ<sup>10)</sup>、そのなかで従来使用頻度の少なかった「プラナカン」という語が使われるようになってきているのである。

しかしながら、プーケット旧市街には、「多種多様な人々が根づいているコスモポリタンな都市」という物語を共有できない他者が存在することを最後に付け加えておきたい。ミャンマー人労働者の存在である。タイは経済成長を背景に、ラオスやミャンマー、カンボジアなどの隣国から移民労働者を積極的に受け入れてきた。今日のタイで、建設業やホテルの清掃業、食堂やレストランのウェイトレスなどを担っているのは、こうした移民労働者たちである。プーケットも例外でなく、ホテルやレストランの従業員など創造産業を底辺から支えているのは、地理的に近接しているミャンマーからの労働者たちである。フロリダは、創造階級の成長と並行して「サービス階級」と呼ばれる低賃金で自律性の低い職業に従事する集団が形成されていることを指摘している（フロリダ2008）。言い換えれば、創造都市化の進行のなかで、社会的・経済的な分極化（polarization）が進行するということであろう（Leslie and Catungal 2012）。以上のような、創造都市化によって生じる社会的格差の再生産といった課題については、現段階でその詳細を論じる力量に欠けており、今後の課題としたい。

## 付記

本発表は、JSPS科研費15H03147の成果の一部です。プーケットでの現地調査に際しては、ツアー会社Phuket Heritage Trailを運営してきたKrichaya, Na Takuathung女士に大変お世話になりました。プーケットで生まれ育った彼女は、プーケット旧市街の文化的価値にいち早く気づき、それを外国人観光客に伝える取り組みを孤軍奮闘で行って来ました。旧市街の住民と深い関わりをもつ彼女のサポートのおかげで、私のフィールドワークも実り多きものとなりました。ここに記して、感謝申し上げます。現在、諸事情により、Phuket Heritage Trailの活動は停止していますが、いつの日か再開することを切に願っています。

## 注

- 1) ショップハウスとは、東南アジアの都市部に広くみられる長屋形式の店舗兼住宅である。植民地時代、建物への税金が間口幅によって決められていたことから、間口が狭く、奥行きが長いという建築の特徴をもつ。一般的には、1階の通りに面したスペースで高いをし、その奥や2階を住居として利用する。内部には、換気や採光、あるいは風水的な理由のために、中庭のような吹き抜けのスペースがあるのも特徴である。こうした建築は、華南地域の文化的影響が強いものの、様々な装飾が施されたファサードにはヨーロッパやイスラームの影響もみられる（宇高2008: 17-18）。
- 2) トンカー（Tongkah）と呼ばれたプーケット旧市街の開発を主導したのが、ペナンの福建系華人一族出身の許心美である。当時シャム王朝は、この一族を頼り、タイ南部の多くの県の統治を委ねた（Khoo 2007: 30, 2009: 93-99）。ちなみに許心美の父親は、タイ南部ラノン県で錫鉱山経営を行い、のちに同県知事も務めた許泗漳である。
- 3) タイにおいて華人の主流派は潮州人であり、バンコクのヤワラートと呼ばれるタイ最大のチャイナタウンにも潮州料理を中心としたレストランが立ち並ぶ。それに対して、福建系華人が中心であったプーケットには、（海峡植民地由来の文化に加えて）潮州とは異なる福建の諸文化が色濃く見られるため、一般的なタイ人にとってプーケットを訪れることは、ノスタルジーのみならず、（タイで主流な）「潮州的なるもの」との差異という点もまた、重要な「指標（marker）」（MacCannell 1999）の1つといえる。ちなみに日本語のガイドブックでプーケット旧市街が紹介される際には、「華人」という言葉が使われることが多く、「潮州」に対する「福建」という「指標」は必ずしも強調されていない。おそらくは、一般的な日本人観光者にとって、潮州的なるものと福建的なるものの差異にはそれほど高い関心がないからであろう。こうした諸アクター間のローカリティへの価値づけの差異をめぐっては、門田岳久も沖縄をフィールドに論じている（門田2017）。

- 4) 1911年に設立された当初は、「フアブーン学校」という名称であった。しかし、戦後反共政策への高まりを背景に政府による華人への抑圧が強まるなか、タイ国家への忠誠というイメージを強調するために「タイフア学校」という名前に改称した (Khoo 2007: 31)。
- 5) ベナンにおけるストリート・アートの詳細については、(藤巻 2016) (鍋倉 2018)などを参照。
- 6) ただし、ストリート・アートをめぐって地域住民から強い反発が生じたケースもある。ストリートアート・プロジェクトの一環として、かつて英チャータード銀行の支店が置かれた建物にウォール・アートを描いたところ、地元住民から反対の声が沸き起こったのである。この建物は、コロニアルな様式に加え、タイ初の外資系銀行という物語性も手伝って、歴史的遺産としての価値が付与され、プーケット旧市街のいわばランドマークの存在であった。それゆえ、プーケット市がこの建物を管理し、現在は博物館として活用している。ストリート・アート自体は、地域住民のあいだで概ね好意的に受け入れられつつも、旧市街のシンボリックな建物へのウォール・アートには強い反発が生じたのである。この騒動を受け、自身も旧市街出身のババ・ブラナカンであるプーケット市長は釈明に追われ、最終的にはウォール・アートの撤去をアーティストに命じることとなった (Bangkok Post 2016)。
- 7) ショップハウスの2階は、B氏の友人が経営する2部屋だけのプティック・ゲストハウスとなっている。
- 8) 店を切り盛りして来たC氏の妻の体調不良により、2019年1月時点ではカフェ営業を休止している。ただし、土産品を中心とした雑貨販売は続けている他、希望者には1人150パーツでショップハウスの内部やC氏のファミリー・ストーリーを紹介する取り組みを新たに始めている。
- 9) コンはタイ語で人、ブンテーは福建語でローカル(本地)を意味する。主に戦前から暮らす福建系華人のことを指すタイ南部の方言である。
- 10) ただし、こうしたベナンとの差異化は、ベナンとの歴史的関係が深く、その実情をある程度理解している地元ババ・ブラナカンだからこそ可能なことであるといえよう。本論文では十分に取り上げることができなかったものの、筆者は、本研究に関連してベナンやシンガポールにおいても短期間の調査を実施している。こうした経験を踏まえると、地域住民がベナンを参照点として語るプーケットの独自性はよく理解できる。しかし、(ベナンを訪れた経験のない) 一般的観光者はこうした言説を十分に「解読 (decoding)」できるわけでは必ずしもない。それゆえ、この点においてもローカリティの価値づけをめぐって、ホストとゲストの間には齟齬が生じていると考えられる (cf. 門田 2017)。

## 文 献

- 安里陽子 (2013): 再構築される歴史とプラナカン概念—プラナカンは誰のことか。同志社グローバルスタディーズ, 4: 29-47.
- 安里陽子 (2014): 新移民の社会統合と脱領域的な主体の構築—シンガポールにおけるプラナカン概念をめぐって。コンタクト・ゾーン, 6: 163-191.
- Bangkok Post (2016): Street Artist 'Alex' defaces his divisive Phuket Mural, *Bangkok Post* (March 8, 2016).
- Chang T.C. and P. Teo (2009): The Shophouse Hotel: Vernacular Heritage in a Creative City, *Urban Studies*, 46(2): 341-367.
- フロリダ, R. (2007): クリエイティブ資本論—新たな経済階級の台頭 (井口典夫訳), ダイアモンド社, 484 p.
- 藤巻正己 (2016): 世界遺産都市ジョージタウンの変容するツーリズムスケープ—歴史遺産地区の観光化をめぐって。めぐみあ。立命館文学, 645: 137-163.
- ハイデン, D. (2002): 場所のカーパブリック・ストーリーとしての都市景観 (後藤春彦ほか訳), 学芸出版社, 319 p.
- Henderson, J. (2003): Ethnic Heritage as a Tourist Attraction: the Peranakans of Singapore, *International Journal of Heritage Studies*, 9(1): 27-44.
- イワサキチエ・丹保美紀 (2007): マレー半島 美しきプラナカンの世界, 産業編集センター, 147 p.
- 門田岳久 (2017): 沖縄の聖地と宗教的なものの観光の再発見 (金成政・岡本亮輔・周倩 (編)「東アジア観光学—まなざし・場所・集団」亜紀書房), pp.127-160.
- 片岡樹 (2014): 想像の海峡植民地—現代タイ国のババ文化にみる同化と差異化。年報タイ研究, 14: 1-23.
- Khoo, Salma N. (2007): Once upon a Time in Phuket: Changing Identities among the Baba Chinese and Thai Muslims in a Tourist Paradise. The Nippon Foundation ed. *Reflections on the Human Condition: Change, Conflict and Modernity: the Work of the 2004/2005*, Tokyo: the Nippon Foundation, 24-38.
- Khoo, Salma N. (2009): Hokkien Chinese on the Phuket Mining Frontier: The Penang Connection and the Emergence of the Phuket Baba Community, *Journal of the Malaysian Branch of the Royal Asiatic Society*, 82(2): 81-112.
- Khoo, Salma, N. (2013). Exploring Shared History, Preserving Shared Heritage: Penang's Links to a Siamese Past. C. Baker ed. *Protecting Siam's Heritage*, Chiang Mai: Silkworm Books, 295-322.
- Khoo, Salma, N. (online): Phuket's Old Town Movement, <http://lestariheritage.net/phuket/webpages/mov01.html> (最終閲覧日 2017年8月31日)
- 金善美 (2018): 隅田川・向島のエスノグラフィー—「下町らしさ」のパラドックスを生きる, 晃洋書房, 243 p.
- Knapp, Ronald G. (2010): *Chinese Houses of Southeast Asia: The Eclectic Architecture of Sojourners & Settlers*, Singapore: Tuttle Publishing, 288 p.

- Leslie, D. and J.P. Catungal (2012): *Social Justice and the Creative City: Class, Gender and Racial Inequalities*, *Geography Compass*, 6(3): 111-122.
- MacCannell, Dean (1999): *The Tourist: a New Theory of the Leisure Class*, Barkley: University of California Press.
- 松嶋健 (2014) : プシコナウティカ—イタリア精神医療の人類学, 世界思想社, 472 p.
- 鍋倉咲希 (2018) : 観光によるアート概念の再編成—マレーシア・ジョージタウンのストリートアート観光を事例に, 観光学評論, 6(1): 19-34.
- Nagata, J. (2000): 'Elasticity' of Heritage, from Conservation to Human Rights, M. Langfield et al eds. *Cultural Diversity, Heritage and Human Rights*, London and New York: Routledge, 101-116.
- 奥村みさ (2009) : 文化資本としてのエスニシティーシンガポールにおける文化的アイデンティティの模索, 国際書院, 346 p.
- オルデンバーグ, R. (2013) : サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」(忠平美幸訳), みすず書房, 480 p.
- Richards, G. (2011): *Creativity and Tourism: the State of the Art*, *Annals of Tourism Research*, 38(4): 1225-1253.
- 佐々木雅幸 (2012) : 創造都市への挑戦—産業と文化の息づく街へ, 岩波現代文庫, 308 p.
- 佐々木雅幸・川井田祥子・萩原雅也編 (2014) : 創造農村—過疎をクリエイティブに生きる戦略, 学芸出版社, 270 p.
- 清水知子 (2016) : Shall We "Ghost Dance"?—ポスト代表制時代の芸術 (藤田直哉編「地域アート—美学/制度/日本」堀之内出版), pp. 217-255.
- 敷田麻美・内田奈芳 (2015) : 地方都市における創造産業としての観光振興とDMO—米国パデューカ市のクリエイティブツーリズムの事例, 日本観光研究学会全国大会学術論文集, 30: 317-320.
- 白石隆 (2000) : 海の帝国—アジアをどう考えるか, 中公新書, 218 p.
- スミス, N. (2014) : ジェントリフィケーションと報復都市 (原口剛訳), ミネルヴァ書房, 404 p.
- タン, C. (2002) : 中国人の移住, 土着化, そしてババ文化の生産, 吉原和男・鈴木正崇編, 拡大する中国世界と文化創造, 弘文堂, 344-376.
- Teo, P. (2003): *The Limits of Imagineering: A Case Study of Penang*, *International Journal of Urban and Regional Research*, 27(3): 545-563.
- Teo, P. and T.C. Chang (2009): Singapore's Postcolonial landscape: Boutique Hotels as Agents, T. Winter et al. eds. *Asia on Tour: Exploring the Rise of Asian Tourism*, London & New York: Routledge, pp.81-96.
- Phuket Thaihua Museum (2008): *Guidebook of the Phuket Thaihua Museum*, Phuket: Phuket Thaihua Museum, 79 p.
- 宇高雄志 (2002) : マラッカ ババ・ニョニヤの住まい, 建築雑誌, 117 (1485) : 7
- 宇高雄志 (2006) : 多元文化社会における文化遺産マネジメント—マレーシアにおける世界遺産登録をめぐる, 西山徳明編, 文化遺産マネジメントとツーリズムの持続的関係構築に関する研究, 国立民族学博物館調査報告, 61: 97-113.
- 宇高雄志 (2008) : 住まいと暮らしからみる多民族社会マレーシア, 南船北馬舎, 131 p.
- 宇高雄志 (2017) : 多民族<共住>のダイナミズム—マレーシアの社会開発と生活空間, 昭和堂, 284 p.
- 吉田竹也 (2012) : 反楽園観光論—バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール, 樹林舎, 414 p.





写真1  
ショップハウスが立ち並ぶ通りで行われる夜市



写真2 プラナカン様式の邸宅を  
プライベート・ミュージアムとした  
「バーン・チンプラチャー」



写真3  
プラナカン様式の旧中華学校の建物を利用した  
ブーケット・タイファ博物館



写真4  
メモリー・アット・オンオンホテルの外観



写真5  
メモリー・アット・オンオンホテルのロビー①



写真6  
メモリー・アット・オンオンホテルのロビー②



写真7  
 プラナカン様式の邸宅を転用した高級レストラン  
 「ブルー・エレファント」



写真8  
 ブックカフェ Bookhemianの外観



写真9  
 ブックカフェ Bookhemianの店内



写真10  
 タイ人作家アレックス・フェイスによる  
 ウォールアート「Red Tortoise Mardi」



写真11 地元の住民や学生らが共同で制作した  
 「シーズン2」のウォールアート。  
 サロン・クバヤを着たババ・プラナカンの女性と  
 ブーケットに伝わる菓子を描いた作品



写真12  
 ウォール・アートが撤去された  
 旧チャータード銀行の建物



写真13  
Torry's Ice Cream Boutiqueの外観



写真14  
Torry's Ice Cream Boutiqueの店内①



写真15  
Torry's Ice Cream Boutiqueの店内②。  
ババ・プラナカンの雑貨や調度品も並ぶ



写真16  
I 46 Old Townの外観



写真17 I 46 Old Townの店内①。間口は狭いものの、奥行きのある典型的なショップハウスの構造。奥と2階は店主の一家3世代が暮らす自宅となっている。希望者には、一家のショップハウスでの暮らしを見学させてくれる。



写真18 I 46 Old Townの店内②。  
カフェ・スペースには、家族の思い出の品が並び、1つ1つについて細かい説明をしてくれる